

幸福に氣付け

七工場 松田利政

一八

人間と謂ふものは他人の幸福には氣が付き易いものであるが、自分の幸福な時には大抵氣付かず居て、其の上勝手な不平を並べることが常のやうである、例へば健康は人間の持つ事の出来る幸福なものの中で、最も大きな幸福の一つである、之は一度病氣に罹つて見ると誰しも即座に悟る事が出来るであらう。

然し常に健康な人は此の大きな幸福を持つて居る事をすっかり忘れて居る、また病氣に一度罹つて健康の有難さを沁々と感じた人でも、病氣が癒へて再び健康を我がものにしてしまうと己れ自ら幸福の持主であることは忘れてしまつて、更に其の上の幸福を捜し索める有様だ。人間の慾求と人間の求める、所謂幸福とは常に同一の距離を以て、相隔つて居る、一方が退けば他方も従つて退き一方が追へば他方もまた、逃げてしまふ、人間はなせ遂に求められない幸福のみ得やうと焦つて居るのであらうか、なせ自分の現に持つて居る幾多の幸福に氣付かうとしないのであらうか。

僕は病に胃されて病床に呻吟しながらこんな平凡な事を考へた。

朝鮮の歌謠から覗く

市山盛雄

民間傳承の歌謠に現はれた朝鮮の民族は極めて純朴で従順な性情を有してゐることが感知される。李朝末期頃に朝鮮方面に於て唄はれ出した俗謠に

煙草よ。煙草よ。

東萊蔚山に上陸した。煙草よ。

お前の國は四時暖かく。

萬國に優るといふに。

何故にみすてて來たんだい。

煙草が笑つて答へるにや。

一九